

海獣と人

NAMMCOフードイイベント



42期 松田 彩
1988年7月広島市生まれ、34歳。米国立オハイオ州立大国際関係学部卒、中国・北京大大学院哲学部中国哲学専攻。西国で12年間生活した。2021年度松下政経塾に入塾し現在2年目。日本と西国の3か国がバランスの取れた関係を持ち、平和な生活を守るために、為政者を志す。食料安全保障や離島防衛などの観点から、日本の一次産業を強化したいと考え、特に漁業振興を探究。海洋大国・日本を目指す。

2日間わたる長い講演で、海産哺乳類の持続可能性について、人々の健康・栄養、無形文化遺産、アイデンティティ、経済的合理性、環境保護、食料汚染、食品安全、食料安全保障などの、現代社会で議論される観点はすべて網羅されたのではないだろうかと思えるくらい、幅広い目線で議論された。北大西洋海産哺乳動物委員会(NAMMCO)を通して、さまざまな地域がコラボすることによって、北大西洋のローカルな声を、より直接的に国際的な議論を呼び込み、それぞれの地域で完結させず、また、文化的アイデンティティの意味付けをしなから、どのように持続的に、海産哺乳類を食料資源として生かしていくのかという大きなテーマ



和歌山・太地町の漁野洋伸副町長も参加した

の中で確認されたといえる。筆者としていちばん感銘を受けたのは、グリーンランドからの参加者は皆、「海産哺乳動物を食べることは、私たちグリーンランドのアイデンティティである」と断言し、根本的な思考が一貫されていたことである。2日目の午後は、参加希望者は会場を離れ、バスに乗り、クラクスビークという町に向かった。フェロー諸島の第一の町で、また、漁業、2018年に和歌山

温暖化で伝統諦める？

向き合った。グローバルとローカルの衝突や、伝統対都市化などのジレンマ、食品としてのリスクと利益など、同時に混在しているさまざまな課題を、ビッグスケールの中でどう理解したうえで、最終的には個人の選択、地域や国の意思決定であることが、参加者

猟が終わったあとに行われる伝統的なチェーンダンスを見せてもらい、私たち参加者も実際に輪になり、全員と手を取り合い、一緒に踊ってみた。音楽に合わせて、左に二歩、右に一步と、繰り返しながら足を動かす踊りで、簡単に楽しめる。

地域差やシエネレーションギャップ、ビーガンなどの食への関心の違いはあるようだが、何百年も前から行われているゴンドウクジラの追い込み猟は脈々と継承されている。地元民の大切な歴史文化である。ほかに、海岸に気まぐれに寄ってくるイルカを捕ることもたまにあり、バンドウイルカ、ハナシロカマイルカ、ネスミールカの3種の捕獲も違法にならない。しかし、フェロー諸島でイルカを屠

先頭の集団に付いていくという鯨類の習性がある。実際、ゴンドウクジラは、英語ではパイロトクジラといわれる。人間がそれらの群れをたやすく引き離せるものでもないという話だった。イルカがゴンドウクジラと混じって泳いでくることも多々あり、人間が追い込み猟をすることが決める時点で、鯨類の種類や、集団の大きさの判断を間違えることはあり得る。



アイスランド、フランス、ブルフェー、フェロー諸島など多様な国の参加者で行われたセッション総括

「地球温暖化を阻止するために伝統文化を諦めなければならぬ時がくるのではないか？」という質問をしていたイラン人のジャーナリストがいたので、どのような考えがあるのか、講演後に詳しく聞いてみた。私は、彼女に何かしらの根拠に基づいた数字があるのだと思い、「いつがそのタイミングだと考えているのか？」と聞くと、「今すぐでもないのではないか」という返答であった。どのよ



伝統的なチェーンダンスを踊っていた方と筆者

うな根拠によるのか分からなかったのだが、「海産哺乳動物が多ければ多いほど、二酸化炭素の排出が減ることとは実証済みで、クジラやアザラシ猟はある特定の地域にとっては継承されてきた伝統であり、彼らの大事なアイデンティティだということも分かるが、捨て去るべきなのではないだろうか」と何度も主張していた。確かに、昨年、米スタンフォード大学から、クジラの生息数を商業捕鯨が始まる以前の水準に回復させれば、地球全体の環境を改善できるという説が発表された。

追い込み猟
フェロー諸島の中でも、成され、船団が集団を湾に追い込むという受け身なやり方である。